

# 2012「植村直己冒険賞」受賞者が決まる

ダウラギリに無酸素で登頂  
日本人初、  
世界8000m峰全14座を完登

ひろたか  
竹内洋岳さん

▲2012年5月 ダウラギリ登山中の竹内洋岳(撮影：中島ケンロウ、写真提供：竹内洋岳プロモーション事務局)

2月25日、植村直己さんの母校の明治大学紫紺館(東京都千代田区)で、2012「植村直己冒険賞」受賞者発表の会見を行いました。今回は、2012年に日本人が挑んだ246件の冒険行の中から、ヒマラヤ山脈のダウラギリ I 峰(8167m)に酸素ボンベを使わず登頂し、日本人で初めて世界の8000m峰全14座完全登頂に成功した竹内洋岳さん(42歳、東京都在住)を選びました。

竹内さんは、1995年(24歳)に初の8000m峰マカルー(8463m)に登頂、翌年には世界最高峰エベレスト(8848m)、K2(8611m)と、次々に8000m峰に登頂しました。2007年に挑んだガッシャブルムⅡ峰(8035m)で雪崩に遭い、瀕死の重傷を負いましたが、翌年、奇跡的な復活を遂げ、同峰に登頂しました。そして昨年5月26日、14座のうちに残る1座となったダウラギリ I 峰の登頂に成功し、20歳でヒマラヤ登山に初挑戦してから21年かけての偉業達成となりました。

東京での会見の様子は、植村直己さんの母校の府中小学校にも中継され、竹内さんは「これまでに会った方々一人一人に支えられて今の自分があり、今日があります。これからも目標を明確に持ち、その到達点に一步步づつ歩みを進めていきます」と喜びの言葉を述べました。

なお、本賞の授賞式は、6月15日(土)に日高文化体育館(日高町祢布)で行います。授賞式では、冒険賞の授与のほか、竹内さんの講演も行う予定ですので、皆さん、楽しみにお待ちください。

《問合せ》植村直己冒険館 ☎44-1515



▲2012年5月 ダウラギリ登山中の竹内洋岳(撮影：中島ケンロウ、写真提供：竹内洋岳プロモーション事務局)

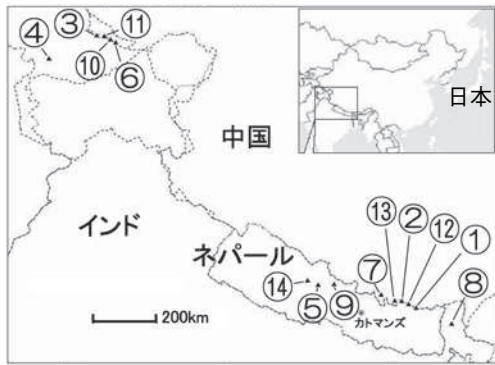


▲東京会場の竹内さんにメッセージを送る府中小学校6年の岸本満奈美さん



▲「冒険賞」を受賞し、喜びを語る受賞者の竹内さん

8000m峰14座登頂の軌跡



登頂順	登頂日	8000m峰14座	標高 (m)
①	1995年5月22日	マカルー	8463
②	1996年5月17日	エベレスト	8848
③	1996年8月14日	K2	8611
④	2001年6月30日	ナンガ・パルバット	8126
⑤	2004年5月28日	アンナプルナI峰	8091
⑥	2004年7月25日	ガッシャブルムI峰	8068
⑦	2005年5月7日	シシャパンマ	8027
⑧	2006年5月14日	カンチェンジュンガ	8586
⑨	2007年5月19日	マナスル	8163
⑩	2008年7月8日	ガッシャブルムII峰	8035
⑪	2008年7月31日	ブロード・ピーク	8051
⑫	2009年5月20日	ローツェ	8516
⑬	2011年9月30日	チョ・オユー	8201
⑭	2012年5月26日	ダウラギリI峰	8167

竹内洋岳さんプロフィール

プロ登山家  
1971年生まれ  
東京都出身  
身長180cm 体重65kg  
血液型O型  
立正大学 仏教学部卒  
(株)ICI石井スポーツ所属



(撮影:中島ケンロウ)  
(写真提供:竹内洋岳プロモーション事務局)

登山好きな祖父の影響を受け、幼少より登山とスキーに親しむ。高校、大学で山岳部に所属し登山の経験を積み、20歳で初めてヒマラヤの8000m峰での登山を経験。

当初は組織登山を行っていたが、2001年からは、ドイツ人クライマーのラルフ・ドウィモビッツや、オーストリア人クライマーのガリンダ・カールセンブラウナーをメインパートナーとし、各国のクライマーと少人数の国際隊を組み、酸素ボンベやシェルパ(案内人)を使わない「アルパインスタイル」を積極的に取り入れた速攻登山を展開している。2002年に結婚。二児の父親。

2012「植村直己冒険賞」特別賞に

渡邊玉枝さん、村口徳行さん

8000m峰5座に登頂し、2004植村直己冒険賞を受賞している渡邊玉枝さん(74歳、山梨県在住)は、昨年5月19日、2度目の世界最高峰エベレスト(8848m)に登頂し、自身が持つ女性世界最高齢の登頂記録を10年ぶりに更新(当時73歳、ギネス世界記録認定)しました。そして、渡邊さんに同行したカメラマンの村口徳行さん(56歳、静岡県在住)もエベレスト7回目の登頂となり、自身が持つ日本人最多の登頂記録を更新しました。ベストパートナーであり、お互いの偉業を支え合ったお二人に、今回特別賞を贈ります。

※サミット…頂上

少年に秘めた「山登りの才能」  
世界の頂へ

竹内さんは、大学山岳部入部をきっかけに本格的な登山活動を始めました。1991年、自身初のヒマラヤ遠征に参加し、シシャパンマ(8027メートル)登頂を目指しますが、登頂アタック隊に選ばれず頂上を踏むことはできませんでした。しかし、その4年後、マカルーに見事登頂し、翌年にはエベレスト、K2を連続して登り切りました。

登山で生きていくという覚悟

2006年、8千メートル峰8座目となるカンチェン

ジュンガ(8586メートル)の登頂を果たし、14座を意識するようになりました。そして同年、プロの登山家を宣言し、14Projectを立ち上げ、目標を「8千メートル峰14座完全登頂」と発表。プロを宣言することで、登山家として生きていく覚悟を決めました。自分にとっていい登山をするため、登山途中は常に自然に耳を傾け、自分の目で見て、感じて、決断し次へ進む。この自然に寄り添う謙虚な登山の実践、次の登山のためには必ず下山しなければならないという信念は、植村さんの精神につながるものがあります。

雪崩事故から奇跡の生還  
日本人初の14座完登へ

標高8千メートルを超える高所は「死の地帯(デスゾーン)」と呼ばれ、酸素が平地の3分の1しかありません。幻覚や嘔吐に襲われ、雪崩や強風といった危険と常に隣り合わせの中、竹内さんは酸素ボンベを使わずに、軽量装備で登頂を目指しました。

2007年、バキスタンのガッシャブルムII峰(8035メートル)で雪崩に巻き込まれ、腰椎破裂、肋骨骨折の重傷を負い、生命の危機に陥りました。しかし、各国登山隊のレスキューにより奇跡的



▲2012年5月26日ダウラギリサミット日に唯一撮影できた頂上の岩場を望む竹内の影の写真。サミット画像としては貴重な1枚(撮影:竹内洋岳、写真提供:竹内洋岳プロモーション事務局)

に生還しました。もはや登山への復帰は絶望的ともいわれましたが、手術、懸命のリハビリにより、わずか1年後に再起し、事故に遭ったガッシャブルムII峰、そしてブロード・ピーク(8051メートル)の連続登頂に成功。その姿は人々に感動を与えました。

8千メートル峰にこだわり、不屈の精神で、あるいは楽しみながら自身自身に挑戦し続ける竹内さん。登山界を超えて多くの人々に注目される中、2012年5月、ついに8千メートル峰14座目のダウラギリI峰へ登頂し、日本人初となる8千メートル峰14座完全登頂という偉業を達成しました。